

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第卷一十五第

月八年五十和昭

哀辭 故財部教授遺影署名及原稿

論叢

支那の農家負債と農地の抵押……………經濟學博士 八木芳之助
水産資源の保全について……………經濟學博士 蜷川虎三

時論

東亞新秩序建設と新國民政府の發展性……………文學博士 矢野仁一

研究

民國初期の兌換券……………經濟學士 徳永清行
自由貿易主義の吟味……………經濟學士 岡倉伯士

記事

財部教授逝く
故財部教授年譜及著書論文目錄

追憶文

神戸 正雄 本庄榮治郎 蜷川 虎三
木村喜一郎 吳文炳 宗藤 圭三
青盛 和雄 松岡孝兒 石川 興二
黒正 巖 藤本幸太郎 谷口 吉彦
岡崎 文規

附錄

彙報

外國雜誌論題

財部先生を憶ふ

本庄 榮 治 郎

◇今から四年前昭和十一年五月頃と思ふが、先生御危篤の報が、偶々上京してゐた私の手元に届き、翌日歸京して大學病院に御見舞したところ、主治醫の話では、臓と名のつくものは大抵故障があり機能を停止せんとしてゐる有様で、九〇%といひたいが九九%まで御回復の見込がないとのことであつた。然るに其後二三日小康状態を維持されてゐるやうであつたが、醫師はやはり「蠟燭の火が將に消えんとするとき一時急に明るくなるでしょう、丁度あれです」といふ挨拶、ところが何時の間にか各臓腑の機能が蘇り遂に奇蹟的に回復された。先生の身體は全く常人の身體を以て律すべからざる何者かであるのであらう。今度の御重患にも、衰弱が相當甚しいやうではあるが、また奇蹟的に回復されるであらうと思ひ、それを期待してゐたのであつたが、遂に七月七日早曉永眠された。誠に痛惜の

至りである。

◇私が法科大学々生時代には先生は丁度海外留學中であつたので、私はその講義を拜聽する機會がなかつた。私は統計學は戸田先生から教はつたのである。それで始めて先生にお目にかゝつたのは大学院學生時代で、丁度學生集會所で經濟讀書會のあつたときで、洋行歸りの新進氣鋭の先生として、勿論背廣服姿の財部先生であつた。その後何時の間にか和服を常用され洋服姿はめつたに見られぬことゝなつた。

◇先生の専攻はいふ迄もなく統計學であり、その方面に於て「社會統計論綱」「ケトレーの研究」等の名著を残してをられるが、農業政策・經濟史等にも造詣深く嘗て此等の講義を受け持たれたこともある。早くから印度研究の重要なことを説かれ、又支那研究にも興味を持たれ、最近には「史觀支那經濟及社會」を講義し或は演習の課題とされてゐた。其他水産經濟や經濟地理にも一家の見を持つてをられ、本草學は殊に興味を持たれ多くの文獻を蒐集され、嘗て樂友會館で小展觀

を行はれたこともあつた。かくて先生は統計學といふ方面のみではなく、地理・歴史・植物その他、見方によつては經濟學以外の各方面に亙つて種々の珍本稀覯書を數多く蒐集されてゐた。

◇昭和六年に國際統計協會は先生を正會員に推薦した。當時同會員は我國では柳澤保恵・長谷川越夫・下條康麿の三氏で、後に阪谷芳郎・高野岩三郎兩氏が同様推薦された。先生が統計學者として世界の學界に重きをなしてをられたことがわかる。

◇先生は終始文章體を用ゐられた。一種の風格を具へた獨得の文章で、難解と見る人もあるが一讀再讀意自ら通ずる處があり、熟讀玩味すべき文章であつた。殊にそれが外國書の翻譯の場合には副詞その他の言葉の位置が極めて忠實に原文に依據されてゐるのがわかる。講義ノートでも、論文の原稿でも極めて几帳面な楷書片假名で句讀點まで克明に打つて記されてゐる。先生の性格の一面をこれで見ることが出来る。

◇先生が二回目の經濟學部長であつたときは左翼思

想問題が相當喧かましくなり、わが經濟學部にも、ある事件が持ち上つたときであつた。先生は學部長としてこの難局切り抜けに非常な努力をされたのであつたが、色々の挿話が残りつてゐる。教授會の後にある新聞記者が部長室で先生にある事柄についてつめよつたところ、先生はたゞ一言「そうかね」といつたきりで煙草をふかして相手にならず、記者もそのまゝ出て行つて仕舞つたといふ。又あるときは學生數名が詰め寄つて來たが、先生は「今年は皇紀何年かね」といふ質問を發せられ、學生は一言も答へることが出来ず、日本紀元を知らぬやうな者は問題にならぬといふので見事學生を撃退して仕舞はれた。奇問といへば奇問であるが、其當時は西曆は知つてゐても日本紀元を知らず、西洋思想にかぶれても日本精神は理會してゐない當時の通弊を、簡明直截に指摘されたものといへやう。其後部長の任を退かれたとき評議會の席上で慣行によつて部長を辭する旨の挨拶をされたが、之が先生の豫期されてゐること全くの逆の結果となり、やがて荒木總長

の辭任となつたことは、其當時評議會の席末を汚してゐた私にとつては誠に残念なことに思つてゐる。先生も、後に此ことを話されて苦笑してをられた。

◇六月下旬先生の病重しといふ報を得て御見舞に行つたところ、先生はよく熟睡してをられたが、やがて眼を覺まされて、上半身を起して「やあ、どうも」といはれたときは、涙がこぼれた。そのとき先生には却て「君はもういゝかね、あれはつらいね」といはれた。之は自分が一昨年夏から暫く右上臍神經痛で困つて居たことを思ひ出されてお尋ね下さつたのであつた。そのとき枕元を探つてをられたが、やがて一冊の本を見せられた。陶希聖の支那經濟史に關する一書であつた。病篤きこの際尙かゝる書物を見てをられるかと思ふと頭が自ら下る感がある。

◇先生と酒との話はあまりに有名であり、色々の奇行もあるが、俗流を超越して酒を嗜む如くに學問を樂しみ論稿を草された先生は、何といつてもわが經濟學部の特異の存在であつた。凡俗の事務的な頭腦で先生

を評することは以ての外である。それにしても還曆を待たずに幽明境を異にされたことは誠に痛惜の至りである。謹んで先生の御冥福を祈る。